

# 福井城下の視的考察

## (4) 九十九橋について

伊豆蔵 庫 喜\*

### Sight of the Fukui castle town(4)

#### “The old Tsukumo Bridge”

Kouki IZUKURA

Tsukumo bridge was the only one across the Asuwa river at the castle town in Fukui in the Edo period and it was known as a rare bridge in Japan. The reason why this bridge was very famous in Japan is that the bridge was built with both wood and stone.

Half of the bridge was made of wood and half was made of stone. This thesis is to investigate the style, the length and the height of Tsukumo bridge in the Edo period on referring to the pictures and the historical materials.

#### 1. はじめに

現在、福井市街地を東西に流れる足羽川には、東の足羽橋から西の大瀬橋まで11本の橋が架けられている。しかし、江戸時代の福井城下においては九十九橋(大橋)が足羽川に架かる唯一の橋であった。九十九橋は半石半木の奇橋として、江戸時代を通じて岩国の錦帯橋などとともに全国的に知られていた。例えば『和漢三才図会』(注1)に、「越前福井の橋長百余丈、而半缸(石)半杠(木)亦一異也」と、紹介されている。また『稿本福井市史(下巻)』(注2)に、「大橋は単に交通の要衝たるにとどまらず、福井城下衆庶の生活は、此橋を中心として展開せり」とあり、九十九橋は北陸道が足羽川を渡る要所にあり、人々の生活は、ここを中心に広がっていたことが伺える。そして現在も「九十九」ゆえに長寿橋として多くの市民に広く親しまれている。

本稿は九十九橋について、絵図や史料を参考にしながら江戸時代における形態や長さ、高さなどを考察するものである。

#### 2. 『福井城旧景』にみる九十九橋

(写真-2)は、福井県立図書館所蔵の『福井城旧景』にみられるもので、幕末頃の九十九橋の様子を描いたものである(注3)。九十九橋を上流方面(東方)より描いたもので、橋の全景や両橋詰め、おおよび橋を渡る大名行列もみられ、当時の橋やその周辺の光景が伺える。

九十九橋の特徴のひとつである半石半木の様子も、この絵から伺うことができる。橋の欄干および9本の橋脚は、中央付近を境に左右で違った表現がなされている。橋南の方は薄い青色で描かれているから石橋、右手の橋北の方は薄茶色であるから、木橋であったことがわかる。さらに橋の下部も違っている。

---

\*建設工学科 建築学専攻

南の石橋側は一面緑色で描かれているから、この一帯は河原であり、北の木橋側は水が流れ、荷を積んだ舟の往来も確認できる。

橋の両端に門が置かれていたことも特異な点である。九十九橋は北陸道の城下中心部への入口にあたるため、ここに門を構えて出入りを厳重に監視していたのであろう。慶応年間の『福井城下絵図』(注4)によると、南詰めの門は小石原門、北詰めの門は照手門とある。小石原門の方は造りが簡素で、屋根は茶色に描かれているから板葺きと思われ、木戸門に近いものだったと判断できる。それに対して照手門は、規模が大きくかつ中央に扉があり、両脇には櫓が延びていて、堅固な門であった。屋根は青色で描かれ、瓦葺きあるいは石瓦葺きであったと思われる。

兩岸の様子も異なる。南詰めの河原は一面に桃木が植えられていて、この一帯は、春には桃の花が咲きみだれ、庶民の憩いの場所になっていた(注5)。一方の北岸は石垣を積んで整備されている。舟付き場があり、着岸している舟もみられ、後方には土蔵が数多く建ち並んでいる。さらに照手門脇には常夜燈や高札が建ち、この北詰めは、越前国各地への里程の起点にもなっていた。



〈写真-1〉九十九橋の現況



〈写真-2〉幕末頃の九十九橋の様子  
(『福井城旧景』より)

### 3. 九十九橋について

#### (1) 九十九橋の沿革

〈表-1〉は福井藩の編年史である『国事叢記』(注6)や『続片叢記』(注7)などの史料を用いて、九十九橋に関する主な事項を年代順に示したものである。

九十九橋は古く、天正年間(1574~1584)に柴田勝家によって架橋されたものと伝えられているが、最近の報告によると、勝家が国主となる以前の延徳3年(1491)にすでに橋の存在が実証されている(注8)。しかし、現在残っている史料では、橋の修理に関するものしかなく、中世の九十九橋の規模や構造については不明である。

江戸時代に入ると、慶長年間や正保2年(1645)、寛文4年(1664)の絵図などにより、橋の様子がわかる。しかし、後述するように、半石半木の構造を確認できるのは貞享2年(1685)の城下図以降であり、それ以前の絵図では半石半木の表現はみられない。その他、架け替えや部分的な修復に関する記述もみられる。

明治になると、時代の変化に伴い変貌を遂げることになる。交通手段が馬や籠から馬車に変わっていくに従い、今までの橋では対処できなくなったのである。

まず明治7年(1874)に、石板を木材に替えて馬車の便を計っている。そして同42年(1909)の工事で橋全体が木製トラス橋に架け替えられた。この時点で石橋部分が無くなり、半石半木の構造は幕を閉じたのであった。

さらに昭和になると、道路事情の変化で九十九橋の役割も一掃されることになる。それまで足羽山麓沿いから九十九橋を通っていた北陸街道が、大正9年(1920)の道路法によって、木田四ツ辻から幸橋を通る路線に変更された。そのため九十九橋は次第に衰退していった。そして昭和8年(1933)には市街地の道路拡幅工事に関連して、幅12mの鉄筋コンクリート造の橋に架け替えられ、昭和61年には橋の老朽化と自動車の交通量の増大により、現在の片側2車線の幅26mの近代的プレート・ガーダー橋となったのである(注9)。

## (2) 架け替えについて

九十九橋の架け替えがわかる最も古いものは、永禄11年(1568)の修理である。これは「瓜生守邦家文書」にみられるもので、橋の修理に使う用材を確保するため領地の樹木に印を付けさせている。次は、天正2年(1574)～6年(1577)のもので、この架け替えには柴田勝家が関与していたと考えられる。

江戸時代になると、架け替え工事は福井藩の直轄で度々行われ、慶安2年(1649)から安政元年(1854)まで12回を数える。このうち、安政元年(1854)の架け替えは、嘉永6年(1853)の焼失によるものである。架け替えの周期をみると、慶安2年(1649)から寛文4年(1664)の15年間が最短で最長は享保2年(1717)から元禄元年(1688)の29年間であるが、ほぼ20年前後が多い(注10)。なお工事期間は5～6月頃に着工し、8～9月頃に完成する例が多く、夏季を中心にして期間は5カ月程要していたことがわかる。

そして橋が完成すると必ず渡り初めの儀式が行われている。

## (3) 名称について

九十九橋の名称は、福井大橋や北庄大橋と書かれている例もあるが、単に大橋と書かれている例が最も多い。幕末の文久2年(1862)に幸橋が繰舟から木橋に架橋されるまでは、江戸時代を通して福井城下には九十九橋の他に橋がなかったわけであり、地元の人々がわざわざ「福井」や「北庄」と呼ぶ必要もなく、単に大橋と呼ぶ方が自然であったためと思われる。

現在は、この橋を「九十九橋」と呼んでいる。しかし、九十九橋の初見は、管見するところ寛政7年(1795)の『東西遊記』(注11)である。そして幕末の文化12年(1815)に編集された『越前国名蹟考』(注12)にも、「大橋 九十九橋とも米橋とも云。」とある。

したがって、江戸時代後期には既に九十九橋と呼ばれていたことがわかる。この名の由来は明らかでないが、橋の長さが99間に近いものであったためあるいは大きくかつ長いものの誇張として付けられたものであろう。

年代	九十九橋の主な事項	出典
延徳3年(1491)	3月 石場、百八間の橋あり。	(冷泉為広卿越後旅日記)
天文12年(1543)	4月 北庄大橋礼銭請取の件	(滝谷寺文書)
永禄11年(1568)	11月 北庄大橋修理の件。	(瓜生守邦家文書)
天正元年(1573)	12月 北庄橋役銭請取の件。	(滝谷寺文書)
天正2年(1574)	大橋始めて懸かる。	(続片蜷記・上 P291)
5年(1577)	大橋かかる。	( " ・上 P501)
6年(1578)	柴田勝家の頃、北庄大橋掛る。	( " ・上 P494)
9年(1581)	我等は市(北庄)の入口の橋を通ったが、予(私)に語った所に依れば、尊師が都に赴かれた際通過された勢多橋と同じ長さで当市は又安土の二倍もあるということである。	(ノリス・フリスの書簡)
柴田勝家時代 (1575~1583)	勝家の臣が石工棟梁彦三郎にあてて、石工の動員を指示している書状。	(木戸市右衛門家文書)
慶長3年(1598)	3.15 大橋出来、北ノ庄育木紀伊守、渡り初め。※1	(続片蜷記・上 P495)
慶安2年(1649)	福井大橋、架橋。(惣奉行 本多内蔵助昌長)	(国事叢記・上 P153)
"	大橋懸け直る。	(続片蜷記・上 P581)
寛文4年(1664)	福井大橋、掛け直る。(惣奉行 笹治刑部正次)	(国事叢記・上 P177)
"	大橋改作する。	(続片蜷記・上 P297)
9年(1669)	寛文の大火の際、本多左近越知山参詣し急ぎ帰り、大橋通行難成り、御舟町の下川越野通り帰る。	(国事叢記・上 P188)
貞享2年(1685)	大橋 長さ88間・幅3間、板橋47間、岸1丈2尺、水5尺、石橋41間。	(越前地理指南)
元禄元年(1688)	5.26 福井大橋掛け直る。橋杭、石板とも残らず相改める。※2	(国事叢記・上 P297)
"	(奉行 彦坂又兵衛)	
"	5. 大橋架け改める。	(続片蜷記・上 P299)
正徳2年(1712)	足羽川に架かりし福井の橋を米橋という、長さ88間なるや、橋の半より西の方は、橋板・橋柱・欄干も皆石にて架けられしなり、当国にことなる石山あるゆえなり。	(帰雁記)
"	越前福井の橋は、長さ100余丈もの半石半木の特異なり。	(和漢三才図絵)
享保2年(1717)	1.19 福井大橋掛け直る。板、欄干改める。※2	(国事叢記・上 P470)
"	(惣奉行 御弓頭 西尾源太左衛門)	
12年(1727)	6.15 福井大橋、普請始まる。(惣奉行 熊谷小兵衛) ※2	( " ・上 P375)
"	8.26 大橋改まる。	(続片蜷記・上 P664)
元文4年(1739)	5. 5 福井評定所より、大橋掛け替えを仰せ付けられた。	(国事叢記・上 P667)
"	(惣奉行 萩野四郎右衛門。この時の用材は、打波(大野郡)の次郎四郎の持山の檜を献上した。)	
"	新に架換、長さ88間 内47間木造鳥居14杭、41間石造鳥居31杭、但し1尺5寸角、北岸犬走りより 高さ1丈2尺、	(福井県土木史・P 14)
"	9月2日渡り初め。	
"	9. 5 今日巳の上刻に、大橋渡り初め。	(国事叢記・上 P669)
宝暦9年(1759)	4.22 大橋、掛け替え役を仰せ付けられる。(千本長右衛門 他) ※2	(国事叢記・下 P374)
"	9. 2 大橋渡り初め。	(続片蜷記・上 P701)
明和元年(1764)	8. 3 大風のため、大橋棚木吹き倒れる。	(国事叢記・下 P636)
安永6年(1777)	大橋、懸け直る。 ※2	(続片蜷記・上 P733)
"	8. 6 渡り初め。	
寛政3年(1791)	8.20 大風雨のため、大橋石欄干38間吹き倒す。	( " ・上 P745)
7年(1794)	越前国福井町の真中に大成川流る。此川にかけ渡せる橋をつくも橋という。九十九橋とかけり。大さ三条橋程も有て、半迄は石橋なり。石橋の大なるもの天下是に勝るものなし。半よりは木のはし也。是は常なみの橋なり。石と木を続合せたるは珍敷橋なり。	(東遊記)
9年(1797)	4.29 大橋掛替わる。 ※2	(続片蜷記・上 P749)
文化14年(1817)	3. 4 大橋架け改まる。(金1両、銀65匁)	( " ・上 P307)
天保5年(1834)	7.12 大風で大橋の吹きねじれ、その他破損多し。	( " ・上 P816)

7年(1836)	4.24 大橋掛け替え普請に付き、八幡町の舟橋を通行する。※2 9.20 大橋出来に付き、渡り初め。(普請奉行 柏谷彦大夫)	( " :上 P840) ( " :上 P841)
弘化3年(1846)	7.18 大雨風で大橋の石欄干30間倒れる。また木欄干傾く。	( " :中 P 75)
嘉永6年(1853) 安政元年(1854)	6.24 大橋焼け落ちる。 大橋御普請出来き、渡り初め。(普請奉行 中村久蔵) ※2	(福井県土木史・P 28) (続 片鱗記・中 P138)
2年(1855)	出水で大橋半分切れる。	( " :中 P151)
慶応3年(1867)	洪水の憂いなきため橋下に乞食居住、これを立退かせる。	(福井県土木史・P 28)
明治7年(1874)	明治7年敦賀県にて架け換える、石板を木材となす。 2月15日渡り初め。 今の橋は明治7年掛け替え、・・・同11年石板を木に代えて車馬の便にす。	(福井県土木史・P 29) (福井巡覧)
42年(1909)	7.18 木製トラス橋に変わる。(橋長79間2尺2寸・幅4間5尺2寸、橋脚は石造、橋体は木造弓形欄橋)	(福井県土木史・P 70)
昭和8年(1933)	9.19 鉄筋コンクリートの橋に変わる。(橋長143.5m、幅12m)	( " :P409)
61年(1986)	5.10 新九十九橋完成する。(橋長143.9m、幅26m) (プレート・ガーダー橋)	(九十九橋ものがたり 写真集・P195)

※1 『続 片鱗記・上』 慶長5年(1600) 3.15条に「大橋掛け出来、渡り初めをする。」とあるが、ここでは慶長3年と同じものと判断した。

※2 『福井県土木史』にも同じように修理があった記述がみられ、いずれも「板橋、欄干とりかえ」とある。但し、この根拠は確認できない。

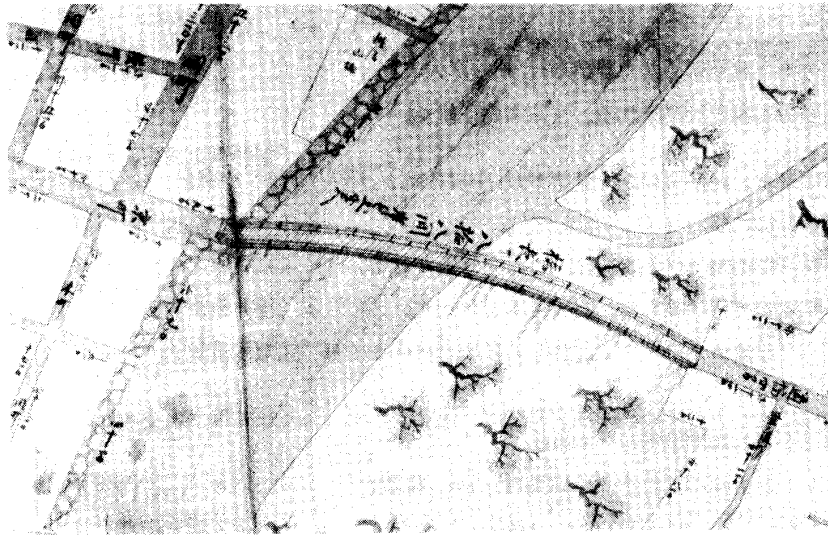
〈表-1〉九十九橋に関する主な事項

#### 4. 半石半木について

##### (1) 半石半木になった時期

すでに述べたように、九十九橋は半石半木の奇橋として江戸時代には全国に知れ渡っていた。この橋を半石半木としたのは一般には勝家と云われている。しかし、確証はない。天正年間の架け替えにおいて、一部に石材が使用されたことは「木戸家文書」にある勝家の家臣の書状によってわかる。これは石工棟梁彦三郎宛の書状で、彼の配下の石屋21人に対し11人は橋の建設現場で作業に当たらせ、他の10人は石材の切り出しを行うように命じているものである。ただし書状の内容を見る限り、この架け替えで半分が石橋になったことは確認できない。仮に木橋であったとしても、多くの石材を護岸の石垣や橋脚の基礎に用いた可能性もある。天正9年(1581)にこの地を訪れたルイス・フロイスの書簡のなかには、「我等は市の入口の橋を通ったが、予に語った所に依れば、尊師が都に赴かれた際通過された勢多橋と同じ長さで、(中略)城及び他の家の屋根が悉く立派な石で葺いてあって、其色に依り一層城の美観を増したことである。」とある。これによると、北ノ庄城の天守の屋根は石瓦が葺かれ、そのために城の美しさが増していると述べているほど鋭い感性をもっていたフロイスが、こと九十九橋に関しては近江国にある勢多橋と同じ長さであると書いているだけである。もし半石半木であったとすれば、フロイスがそれに気付く、その特異性を書き留めていたものと考えられる。

半石半木の構造が確認できるのは、今のところ貞享2年の(1685)の『越前地理指南』(注13)と同年の『福井城下絵図』(図-1・注14)である。前者は橋の長さ88間・幅3間で板橋47間、石橋41間とあり、全長および石橋と木橋の長さが明記されている。後者にも長さ88間とあり、橋の中ほどの河原と足羽川の流路を境に石橋と木橋では違った表現がなされている。そしてこれ以降は架け替えの記述からも石板や欄干を改めるとあり、石と木の構造をもっていたことがわかる。



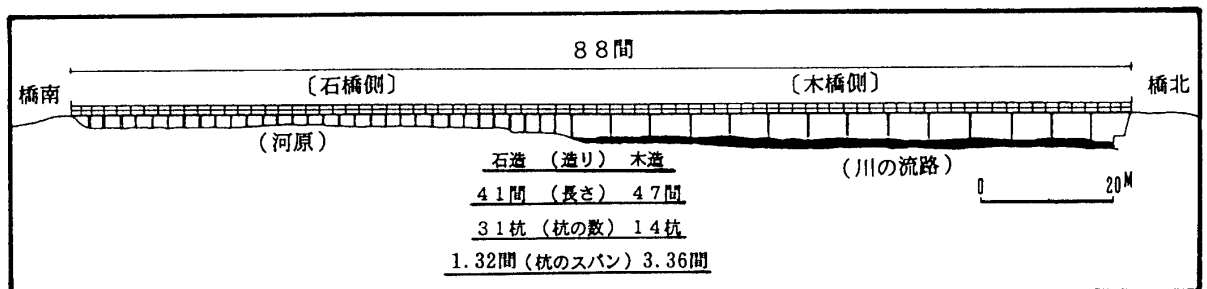
〈図-1〉  
貞享2年(1685)の  
『福井城下絵図』〔部分図〕  
(『九十九橋ものがたり写真集』  
より複写した。)

また、正徳4年(1714)や享和3年(1803)の『福井城下絵図』(注15)および明治10年頃(1882～)の『越前三大川沿革図』(注16)をみても、貞享の絵図と同じように石橋と木橋との区分が顕著に表わされている。ところが慶長年間や正保2年(1645)、寛文4年(1664)の『越前国絵図』(注17)をみる限り、長さは98間で、橋の表現の違いはなく単に木橋が書かれているだけである。この橋の長さは貞享以前が98間、以後が88間であり、絵図の表現も違っていて貞享2年を境に橋の長さや表現が異なっていることがわかる。

## (2) 半石半木の造り

元文4年(1739)の架け替えの記録に「長さ88間 内47間木造鳥居14杭、41間石造鳥居31杭、但し1尺5寸角、北岸犬走りより高さ1丈2尺」とある。木橋は47間の長さで鳥居状に組まれた杭が14本打たれていた。一方の石橋は長さ41間で31本杭が使われていた。したがって木橋の杭の間隔は3.36間前後になり、石橋の方は1.32間前後になる(注18)。つまり橋脚間の長さは、木橋の方が石橋の約2.5倍であり、杭の数も半分で済むことになる。また太さについては1尺5寸角あることから45cm角だったことがわかる。但し、石杭が45cm角であったことは後述する遺構からもわかるが、木杭の太さはせいぜい30cm角ぐらいであったと思われる。また北岸犬走りより高さ1丈2尺とある。他にも岸1丈2尺とある例が多く、橋北の岸の高さであると思われる。一方、慶応年間の絵図には川幅46間と書かれていて木橋の長さの47間と類似している。すなわち、川幅いっばいに木橋が架かっていたことが明らかである。

以上の結果から、当時の九十九橋の概略を示したものが〈図-2〉である。



〈図-2〉九十九橋の概略図

### (3) 半石半木になった理由

半石半木の理由は、いろいろな説が伝えられている。例えば、敵の攻撃が城下に迫ったとしても木橋を焼き払うことにより防御できるという説や洪水の際、濁流が押し寄せても川側の木橋の流失だけで済み、石橋を再建するほど労力や費用がかからなくて済むという説などである。また橋の用材を運ぶのに便利であった点も理由のひとつになる。橋南は笏谷石の産地である足羽山に近く、そこで採掘された石を運ぶにしても近い方が便利で(注19)、それに伴い橋南地域には石職人も多く、その技術を活用したとも考えられる。一方の木橋の用材は、遠く大野あたりから運ばれているのが記録の上でも確認できる。これについても足羽川を使って、筏に組んで運搬すれば容易である。

先に述べたように石の橋では橋脚間の幅を大きく取ることが不可能で杭の数も多くなり、舟が通るには、石橋とすれば幅が狭く困難であった。したがって、水が流れる方を橋脚間の幅を大きく取ることができる木橋にした説も考えられる。

### 5. 橋の長さについて

史料にみられる九十九橋の長さを(表-2)にまとめてみた。江戸前期から中期にかけては長さ98間(178m)が多い。中期から幕末には88間(160m)の例が多く、貞享2年を境に変化がみられる。そして木橋が47間(85m)、石橋が41間(75m)という。石と木のそれぞれの長さが明らかになるのも、長さが88間となる中期以降である。なお半石半木と云われているが、

年代	橋の長さ	出典
延徳3年(1491)	108間(196m)	冷泉為広卿越後旅日記
正保2年(1712)	98間(178m)	越前国絵図
寛文4年(1664)	98間	越前国絵図
貞享2年(1685)	88間(160m)	福井城下絵図
"	88間	越前国絵図
"	88間	越前地理指南
正徳4年(1714)	(木橋 47間・石橋 41間)	福井城下絵図
元文4年(1739)	85間(155m)	福井県土木市史
慶応年間	88間	福井城下絵図
(1865~1867)		
明治42年(1909)	79間2尺2寸(144m)	福井県土木市史
昭和8年(1933)	143.5m	"
"61年(1986)	143.9m	九十九橋ものがたり集

〈表-2〉史料にみる九十九橋の長さ

木の方が5間(9m)ほど長がかったことがわかる。

### 6. 橋の高さについて

#### (1) 現存する石柱の高さ

九十九橋の橋脚に使われていたと伝わる石柱は現在、福井市郷土歴史博物館(写真-3)、柴田神社、西光寺の3カ所に残されている。これらの大きさを(表-3)に示した。

所在地	種類	太さ(mm)	長さ(mm)
福井市郷土歴史博物館	丸柱	長径450	2430
柴田神社	角柱	500×400	2500
西光寺	角柱	650×470	2750

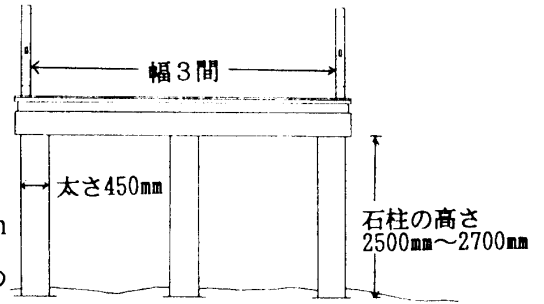
〈表-3〉現存する石柱の大きさ

郷土歴史博物館のものは丸柱であるが残りの2本は角柱である。これについては明治期の古写真に丸と角の橋脚が交ざって使用されており、問題はないと思われる。



〈写真-3〉現存する石柱  
(福井市郷土歴史博物館)

太さは丸柱が直径450mm、角柱は400～650mmである。  
これは前述した記録中の1尺5寸角とも近似している。  
一方、長さは2430～2750mmで、平均は約2.6mほどである。3本とも特に切り縮めた形跡はなく、当時のままと思われるが、この上に橋桁が乗ったとしても3m前後であったことになる。これをもとに、石橋の構造の概略を図に示したものが〈図-3〉である。



〈図-3〉石橋の構造概略図

## ②現状との対比

この度、桜橋北詰めの工事現場から、江戸時代の旧地盤面が発見された。旧地盤の高さは、現状より約4m低い位置にある。現在の足羽川の水面を、当時と同じと考えたと、水面から旧地盤までは約2.5mとなる。これは先の石柱の高さに類似している。したがって、当時の道路は橋のたもとでいくらかは高くなっていたと考えられるが、現在ほどの傾斜はなく、町の高さで橋が架けられていたことになる。

## 7. 結語

以上、九十九橋に関して考察してきた。その結果、次のようなことを明らかにできた。

- ① 九十九橋の初見は古く、室町時代中期頃には橋の存在が確認できる。
- ② 橋の長さは、江戸時代前期は98間であったが、中期以降88間とある。
- ③ 半石半木の状態を確認できる最も古いものは貞享2年で、その構造は石橋が41間、石杭が31本で1.32間幅であり、木橋が47間、木杭が14本で3.35間幅であった。
- ④ 橋の架け替えも20年を目安に行われていた。
- ⑤ 旧景の絵図をみるかぎり、いかにも大橋らしく、長くかつ高く描かれているが、実際の橋の高さは約3mほどであり、現在の橋と比較にならないほど低いものであった。

## （注）

- (1) 正徳2年(1712)に寺島良安が著述したもので、江戸時代の百科辞典といえる。
- (2) 福井市編・発行(1941)
- (3) 拙著『福井城下の視的考察(1) 福井城旧景について』福井工業大学研究紀要25号(1995.3)
- (4) 松平宗紀氏所蔵『松平文庫』福井県立図書館保管(『九十九橋ものがたり写真集』(1986)所収)
- (5) 舟沢茂樹『福井城下ものがたり』福井PRセンター(1977.4)
- (6) 『国事叢記 上・下』福井県郷土誌懇談会(1963～64)、田川纒編(1846)
- (7) 『続片鱗記 上・中・下』福井県郷土誌懇談会(1963～64)、山崎英常編(1844～47)
- (8) 『県史研究3』の小葉田淳「冷泉為広卿の越後下向日記と越前の旅路」によってわかる。
- (9) 『福井県土木史』福井県建設技術協会(1983.5)
- (10) 但し、慶安2年以前には、51年間修理がみられない場合もあり、天正年間のように5年間に3回も行われている場合もある。
- (11) 橘南谿著(1794)『東西遊記』の二之巻『東遊記』(『日本庶民生活史料集成二十巻』に所収)
- (12) 杉原丈夫編『新訂越前国名蹟考』松見文庫(1980.10)
- (13) 『松平文庫』所蔵・福井藩編(1685.7)
- (14)～(17)注4と同じ。
- (18) 石橋の長さ41間を石杭の数31本で割ると1.32間となり、杭のスパン約1.32間となる。木橋も同じように算定すると3.36間前後になる。
- (19) 小林健寿郎氏のご教示による。

〔後記〕 この小論を作成するに際し、吉田純一氏(福井工業大学)のご指導を受けた。また清水学さん(当時福井工大4年、吉田研究室)に史料整理の協力を得た。末尾ながら感謝申し上げる。

(平成7年11月27日受理)